

# 異世界転生

君との再会まで  
長いこと  
長いこと2



アニツキーブラッザー

ファルガ・エルファース

フォルナの兄で、  
人類最高峰の武人。  
一見冷淡ながら根は熱い。

イーサム・コンドウ

世界最強と言われる  
「四獅天巫人」の一人。  
性格はどこまでも豪快。

フォルナ・エルファース

ヴェルトの幼なじみの王女。  
勝ち気な性格だが、  
思慮深い一面も。

神乃美奈

リューマの同級生で、  
彼がクラスに溶け込む  
きっかけとなった。

バルナンド・ガツバーナ

巫人部隊「シンセン組」の  
参謀を務める。  
シャイで口ベタな好々爺。

ムサシ・ガツバーナ

おっちょこちょいな巫人剣士。  
バルナンドの孫娘でもある。

ヴェルト・ジーハ

不良・朝倉リューマが転生した、  
本編の主人公。ひねくれた性格  
だが、周囲からは愛されている。

ウラ・ヴェスパダ

リューマの同級生鯨島の娘で、  
魔族の「ソンドレお姫様」。

主な登場人物

## 第一章 プリンセシユラバ

前世の日本で不良高校生だった俺、朝倉リユーマは修学旅行中にクラスごと事故に遭い、ヴェルト・ジーハとして異世界に転生した。

今は、同じく転生者で元担任の小早川先生がやってるラーメン屋に住み込んで働いている。昔は朝が苦手だったが、もうすっかり大丈夫だ。何せラーメン屋は毎朝、スープの仕込みとか店内の掃除とか、色々やる必要があるからな。

でも……今朝はなかなかベッドから起き上がれない。

昨日、成り行きで人類対魔族の戦争に参加したために、心身が疲れ切っているというのもある。だが、そのせいだけじゃなかった。

「ありゃ？」

腹の上に何か乗ってる。っていうか、誰かにしがみつかれている。

薄く目を開けると、目の前でグッスリ眠っている魔族のお姫様、ウラがいた。

あゝ、そういや、昨夜は一緒に寝てやっただけ？

ウラはよく寝ている。ただ、目元が赤い。涙のあとだろう。

それでもこうしてグッスリ眠っているのだから、ちっとは俺に気を許してくれているのかな。にしても……ベッタリしがみつきます。

「つーか、白と水色のパンツ見えてるぞ。お姫様が、ちよつとはしたないんじゃないか？」

めくれ上がったワンピースパジャマの裾を伸ばしてやり、俺はゆっくりと体を動かす。

絡まった紐をほどくように、そつと抜け出そうと……。

「ヴェ、ヴェルト！」

「うお、起きた！」

俺がわずかに動いただけで、ウラが目を覚ました。

悪夢でも見ていたかのような表情で俺を見て、何度か瞬きをしたあと、安心したのか大きく息をつくウラ。

「よかった……」

「お、おお？」

「夢で、ヴェルトが、私を置いてどこかに行ってしまった……」

そんな夢を見たのか？ にしても、慌てすぎだろ。

「ヴェルト、その……おはよう」

「……お、おはよう」

「ふっ、ふふふふ」

今度は嬉しそうに笑い出しがった。何なんだ？

「不思議な感じだ」

「あっ？」

「これまでは朝起きたら、城の女官が扉のところに立っていた。誰かと一緒に寝て、こんなに間近で挨拶したのは初めてだ」

「おお、そうかそうか。そりゃよかったな。俺なんてこの家に住むことになった初日は、先生にお玉で殴られて起こされたつてのによ」

ウラは俺をじつと見て、頷く。

「でもいいな、こういうの。うん、何かいい」

「はは、そーか。そういや、親父とは一緒に寝てなかったのか？」

「何を言う。私はもう十歳だぞ？ そんな子供じみたことするはずがないだろ」

……ここはツッコミを入れたほうがいいんだろうか？

十歳って、まだガキだろうがよ。

いや、ツッコミを入れるなら今の言動にじゃなくて……自分の唇に指を当てて、トロンとした目で俺を見ることがか？

「ヴェルト……ん」

「……」

「ほら、お、おは、おはようのアレだ。昨日は、私から、その、し、しただろ？」

「……」

「こ、ここ、今度は、ヴェルトからだ。ほら、ん〜！」

「ウラはしきりに唇を突き出してくる。」

「……ヴェルト、ん〜！ ほら、ん〜！」

鯨島、お前の娘はおはようのキスをするのが日課なのか？ だとしたら、誰としてたんだ？ まさかお前か？ 世界に恐れられた魔王の、お前なのか？

で、お前、そんな娘を俺に託したのかよ？ 元クラスメートってだけで？

しかも、頬やおでこへのチューでごまかす選択肢はない。唇の一択だけ。さっきは気を許してくれたと安心したが……これはちょっと許しすぎだ。

やつぱりこいつも、この国の王女で俺の幼なじみであるフォルナと同じで、とんでもねえマセガキだな。

「こら」

俺はウラの鼻をつまんで捻ってやった。

「ふぎゃ！ 痛あ！ な、何をする！」

そんな恨めしそうに睨んでもダメだ。

ガキのキャッキャウフフにや付き合ってらんねー。

「ヴェルト、お前は〜、わ、私としたくないのか！」

「くはははは、残念でした」

「う〜、おのれ〜、私が、私がこんなに……」

「ふん、バーカ。十年早えよ」

「この照れ屋め！」

あ？

「いやウラ、お前、なに自惚れを言ってる……」

「お前は意気地のない奴だ。まったく、情けないぞ！」

「うるせーな。大きなお世話だよ」

「仕方ない。お前は本当に仕方のない奴だから……私からしてやるんだからな」

「はっ？」

……しまった、この流れは。

「ん」

「っ！」

完全に油断してて、隙を突かれてしまった。

一瞬のうちにウラの両手が俺の後頭部をロックし、俺は身動きが取れなかった。そして唇にキスされてしまったのだ。

鯨島……見てるか？ 俺は、悪くねーよな？  
だからさ——。

「朝早く失礼しますわ！ ヴェルト、起きていますか？ 昨日はあの女とあれ以上何もなかった——」  
だから……。

「おい、ヴェルト、起きてるか？ ラーメンの仕込みをするから早く顔洗って——」  
頼むから俺の代わりに、こいつらに言ってくれ。

俺は何も悪くないって。

「う、あ、こ、この浮気者おとおおとおお！ それに、泥棒魔族うううう！」

「こんの、ロリコン小僧がああああああ！」

フォルナと先生が同時に叫ぶ。フォルナはそのままベッドの上のウラにダイブした。

やべえ、すげえめんどくせえ。

すっかりウラとフォルナ、気の強い奴らだからそのうちモメるとは思っていたが……早速かよ。  
お姫様が、朝っぱらから取っ組み合いしてんじゃねえぞ。

「あ、あなた、あなた、あなた！ ヴェ、ヴェルトに何をしていますの！」

「べ、別に何でもない、『おはよう』の挨拶をしただけだ。それより人の部屋に無断で入ってくる

とは……姫にしては礼儀に欠けるのではないか？」

「は？ 何を言ってます？ おはようの挨拶？ 礼儀に欠ける？ 人のヴェルトに手を出しておい

て、あなた一体何を言ってますの!？」

「違う、ヴェルトは昨日から私のものになったんだ！」

おいおい……。

「何を！ ヴェルトは五年前からずっとワタクシのものですわ！」

「でも、私は、もうキスしたぞ！」

こちら……。

「残念でした！ そんなもの、ワタクシはもう大昔に済ませてますわ！」

頼むから、喧嘩はやめろ。

「ヴェルト！ お前、ウラちゃんが元クラスメートの娘だって分かってんのか!？」

先生もお願いだから落ち着いてくれ。何を朝からキレてんだよ。

「あゝもう、メンドクセ。殴れ殴れ、もう反論するのもかったりい」

「そうか、なら遠慮しねえ！」

頭に先生の拳骨が飛んできた。

「いって！ マジで殴った！ マジで殴った！」

「おお？ だったらどうだつーんだ、このロリコンのクソガキが！ 『体罰だ』って国王にでも



訴<sup>う</sup>えるか？」

「普通に考えろって。ガキ同士で戯<sup>たわ</sup>れてるだけだろうが！」

俺はロリコンなんかじゃねーっての。

というか――。

「つたく、大体先生だってよ、よく知ってんだろ？ 俺が惚<sup>ほ</sup>れてんのは……」

そう、こんな十歳のガキども、俺にとってはただのマセガキだ。

俺が惚<sup>ほ</sup>れてるのは、あいつだけ。

「ほら、俺には……神<sup>かみ</sup>乃<sup>の</sup>がいるし……」

やべ。なんか自分で言<sup>い</sup>ってて恥<sup>は</sup>ずかしくなってきた。

神<sup>かみ</sup>乃<sup>の</sup>美<sup>み</sup>奈<sup>な</sup>。俺が初めて好きになった、高校の同級生。こいつを探<sup>た</sup>ねることが、俺の今の人生の目標<sup>め</sup>だ。

「ヴェルト！ 誰<sup>たれ</sup>ですの、そのカミノとは！ そういえば以前にも言<sup>い</sup>ってましたわね！」

「ヴェルト！ カミノとは一体どこのどいつだ！ 昨日も父上と話<sup>わ</sup>してたな！」

そう言<sup>い</sup>いながら詰め寄<sup>よ</sup>ってきた二人のパンチが、同時に俺<sup>おれ</sup>の顎<sup>あご</sup>を打<sup>う</sup>った。

おい、何<sup>なん</sup>でお前は、こんな時<sup>とき</sup>だけスゲー息<sup>いき</sup>が合<sup>あ</sup>ってんの？

打ち上げられて今度は天<sup>てん</sup>井<sup>じょう</sup>とキスした俺<sup>おれ</sup>の意識<sup>いしき</sup>が遠<sup>とほ</sup>ざかり……先生<sup>せんせい</sup>の家に厄<sup>やっ</sup>介<sup>かい</sup>になって、初めての二度寝<sup>にどね</sup>を経<sup>く</sup>験<sup>けん</sup>することになった。

†

まったく、朝<sup>あ</sup>から散<sup>ち</sup>々な目<sup>め</sup>に遭<sup>あ</sup>ったぜ。

女<sup>す</sup>に好<sup>す</sup>かれるのが、ここまでめんどくさいとは思<sup>おも</sup>わなかった。女<sup>おんな</sup>というか……子供<sup>こども</sup>な。

あのあとラーメンの出<sup>で</sup>前<sup>まへ</sup>のついでに王<sup>おう</sup>都<sup>と</sup>の街<sup>まち</sup>を案内<sup>あんない</sup>することになり、俺<sup>おれ</sup>は今<sup>いま</sup>、ウラと並<sup>なら</sup>んで街<sup>まち</sup>中<sup>なか</sup>を歩<sup>ある</sup>いている。

無理矢理<sup>むりじり</sup>ウラに手<sup>て</sup>を繋<sup>つな</sup>がれてるけど、まあいい。

なぜか一緒<sup>いっしょ</sup>についてきたフォルナが俺<sup>おれ</sup>の手<sup>て</sup>を握<sup>にぎ</sup>ってきたのも、まあいい。

俺<sup>おれ</sup>は出<sup>で</sup>前<sup>まへ</sup>の罔<sup>む</sup>持<sup>ぢ</sup>ちを魔法<sup>マジック</sup>「浮<sup>う</sup>遊<sup>ゆう</sup>」で浮<sup>う</sup>かせて運<sup>は</sup>んでいるから、両<sup>りょう</sup>手<sup>て</sup>が塞<sup>ふさ</sup>がっても問題<sup>もんだい</sup>ない。  
でもさ。

「ふー！ ふー！ ふー！ ふー！」

「キシヤアア！」

俺<sup>おれ</sup>を挟<sup>くさ</sup>んで威<sup>い</sup>嚇<sup>かく</sup>し合うのはやめてくれ。

「ここが本<sup>ほん</sup>屋<sup>や</sup>だ。まあ、勉強<sup>べんきやう</sup>嫌<sup>きら</sup>いな俺<sup>おれ</sup>はあんまり来<sup>き</sup>ないけどな」

「フー！ フー！ フー！」

「ガルルルルルル」

「んで、あつちは肉屋。店のおつちゃんと仲良くなると、試食でハムとか食わせてくれる」

「ギリギリギリギリギリ」

「グルウ、グルウウ！」

「そんなあつちが、俺がちよくちよく行く武器屋で——」

「フシュウウウウ！」

「グウウウウウウ！」

俺の我慢も限界だった。

「ダメエら、いい加減にしろ！」

繋いだ手を放し、俺は拳骨で二人を叩いてやった。

「あいたっ」

「うっ、ヴェルト、何をする」

こいつらは仲が悪すぎる。

「あのな、フォルナ。お前は俺がウラに構ってばっかとかで嫉妬してんだろうけど、仕方ねーだろ？ こいつは一人ぼっちなんだから、俺が何とかしてやんねーと」

「うっ、分かってますわ。というか、嫉妬という言い方はストレートすぎます……もう少しこう、マイルドに……」

「ウラ、おめーもだよ。フォルナをあんま挑発すんなよな。大体、ちよーっと俺が力になってやっ

たぐらいでベタベタすんのもどうかと思うぞ？」

「ぐっ、ヴェ、ヴェルト、お前はデリカシーがなさすぎるぞ！ 悪かったな、簡単にお前にコロッといっけてしまつて。でも仕方ないだろー！」

つたく、だからガキつてのは面倒なんだよ。

そーいや前世の幼稚園とかでも、同じ組の女子から「大きくなったらリユーマ君のお嫁さんになつてあげる」なんて言われたことがあったが、いざ成長してみたら、そいつら全員俺を下無視しやがつたからな。

ほんとにめんどくせー。

「でもヴェルト……ワタクシはこの女の、ヴェルトに対する思いが分かるから、我慢できませんわ！」

そう言つてウラを指差すフォルナ。

「こいつはズルイ！ 私の気持ちを知らないながら、お前を独占しようとしている！」

ウラも負けじと指を向ける。

「独占？ 当然です！ ヴェルトはワタクシのものですから！」

「違う！ 昨日から私のものになったんだ！」

おいお前ら、街の連中がガン見してるぞ。

こんな公衆の面前で……ああ嫌だ、もう帰りたい。



「つたく……ん？」

あれ？　そういえばおかしいな。いつも俺とフォルナをからかう王都の連中も、こんな絶好のネタが揃ってるのに何も言ってこねえぞ？

いや、見てはいるけど、どいつもこいつも遠くでヒソヒソ話してるだけで……。

「ねえ見て。あの子よ、例の魔族の娘っていうのは」

「ヴェルトが連れてきたそうだが、この国が魔族に狙われたりしたらどうするんだ？」

ああ、そういうことか。

そういえば俺はこいつらの目——街の連中がウラに向けている目を知ってるな。

神乃に無理矢理学校へ登校させられて、俺が教室に足を踏み入れた瞬間、誰もが向けてきた目と同じだ。

厄介者。

関わりたくない。

そんなところだろう。

ただし、俺の場合は神乃という存在がいたから、そういう目を向けていたクラスの奴らも徐々に変わっていった。普通に俺に話しかけてくるようになった。体育祭が終わったあたりから、特に。

そっか、そうだよな。

ウラは俺とは事情が違うかもしれないが……それでも俺にしてやれることが、一つあったんだ。

俺は神乃に、学校へ行くきっかけを作ってもらった。

だが、最初からクラスに溶け込めたわけじゃない。

転機は体育祭だ。

神乃に煽<sup>あお</sup>られてこの行事<sup>ぎぎうじ</sup>に参加した俺は、気づけばクラスの奴らと一緒に、優勝目指して夢中で戦っていた。そしていつの間にか馴染んでいた。

ウラもそうなければいいんだ。あの時の俺と同じように。

その環境を、俺が用意してやればいい。

「大体あなたは魔族の王女とはいえ、今後はこの国に暮らすのですから、もう少し慎<sup>つつし</sup>みを持ちなさい！」

「うるさい。お前はここの国の姫なんだからヴェルトみたいな平民じゃなく、どっかの貴族と結婚すればいいだろう！」

よし、やるか。

名づけて、異<sup>い</sup>越<sup>えつ</sup>同<sup>どう</sup>舟<sup>しゅう</sup>作<sup>さく</sup>戦。

体育祭の時の他クラスじゃねーが、こいつら二人の「共通の敵」を作ればうまくいくはずだ。

「お前ら！　いい加減にしねーと……二人まとめて嫌いになるからな！　おらー！」

俺は二人の肩に一度触れてから、両手を胸の高さまで振り上げた。

「ふえっ、なっ、えっ！」

「なな、何!? こ、これは!」

二人とも驚いている。そして街の連中も。

フォルナとウラが、急に宙に浮いたからだ。

「こ、これは、飛翔? いえ、違いますわ!」

「バカな、ヴェ、ヴェルト、お前、一体私に何をした!」

「なーに、じゃじゃ馬どもにちよっとしたお仕置きを、な」

俺が両手を交差させる。すると、宙に浮いた二人が頭をぶつけ合った。

「ぎゃっ、あた、あたた、ヴェルト、これはあなたの魔法ですか!」

「くっ、どういことだ、何が起きている!」

宙に浮いて身動きが取れない二人。事態の把握で頭がいっぱいってところか?

「ああ、俺の魔法だ。俺が使える、たった一つのな」

「でも、あなたが使えるのは……浮遊だけだったはず!」

「浮遊だ?」だがあの魔法は、生物には効かないのでは!」

そのとおり。浮遊が有効なのはあくまで術者が触れた「物」のみ。

人や魔族や動物など、「生物」を浮かせることはできない。でも、そんなことは問題じゃない。

生物の周りの物を浮かせればいいだけだろ。

だから俺は、二人が着ている服を浮かせた。それにたづねられて、着ている本人も浮いてるってだけ

の話だ。

二人がそう思わないんだったら、それはそれで儲け物だけだな。相手が混乱してくれりや、ますますやりやすいからよ。

「ぐっ、何でもいいです、とにかくこんなの恥ずかしいですわ! ヴェルト、早く降りなさい!」

「その、ス、スカートが……」

自分のひらひらスカートの裾を手で押さえながら、顔を赤くしてモジモジする二人。

これでちつとは大人しくなるか?

「ほれ」

俺は指を鳴らして浮遊を解除する。本当はこんな動作は必要ないのだが、何となくカッコイイからやってみた。

すると二人は急降下し、受け身も取れずに地面に落ちた。

「ぎゃふ!」

「あた、いた、たた、お、おのれ」

子供とはいえ、人間と魔族の天才児相手でも……十分通用するな。やっぱり使えるぞ、この魔法。

「どーだ? ちつとは懲りたか? くったらねー喧嘩してんじゃねえよ。それと一つ教えとくが、俺はうるさいマセガキは好きじゃねーんだよ」

「つつ、ヴェール〜ト〜」

「ヴェルトのくせに、私に何という無礼を」

ああ、睨んでる睨んでる。二人とも怒りに満ちた目をしてやがる。

「ヴェルト、ちょっとやりすぎですわ！ お仕置きして差し上げます！ 妻に暴力を振るうなど、殿方<sup>とのがた</sup>として最低ですわ！」

「ヴェルト、お嫁さんに対してこの仕打ちは度が過ぎるぞ？ 私がみっちり教育してやろう！」

おお、息ピツタリ。こんなに俺の思惑<sup>おもわく</sup>どおりにいくとは。ちょろいもんだぜ。

「あらら、元氣なガキどもだな。度が過ぎてんのはお前らだろ？ つか、俺にお仕置き？ やつてみろ、チビッコども」

もう少しだけからかって……じゃなくて、泥<sup>どろ</sup>を被<sup>か</sup>つてやるか。

二人が同時に駆け出そうとする。だが、俺は再び浮遊<sup>レベレーション</sup>で奴らを浮かせる。

「いくぜ、ふわふわ時間！」

「同じ手は通用しませんわ！ 身の程を知らない！」

「何度も通じると思うな！」

その瞬間、俺の両手に刺激が走った。

これは、奴らの魔力やオーラによる干渉<sup>かんしょう</sup>で、俺の浮遊<sup>レベレーション</sup>が強制的に解除されたことを意味する。

「雷神<sup>おとめ</sup>の乙女よ、その涙を纏<sup>まと</sup>いし力に変えて——無限の雷轟<sup>らいこう</sup>、世界に光れ！」

フォルナの詠唱<sup>えいしょう</sup>。電気が空気を伝わって、ビリビリと痛い。

「魔法兵装<sup>まほうへいそう</sup>、迅雷烈覇<sup>じんらいれつぱ</sup>！」

さらにフォルナが何やら凄そうな単語を叫ぶと、その体から閃光<sup>せんこう</sup>があふれ出した。

な、何それ？ マドーヘーソー？

ああ、魔法学校の授業で聞いたことあるな。

魔法を放出するんじゃない、その莫大<sup>ばくだい</sup>なエネルギーを自分に向けて身を包み込むことで攻撃と防御を一体化させる技、だっけ？

だけど、あまりにも高度過ぎて学校の教員もできない、とかいう話だった。

「こおおおおお！」

ウラはいえ、何やら精神統一して、目に見えるほどの凄まじいオーラを纏いやがった。

……ごめんなさい……俺が大人げなかった。許してくれ。

それってどー見ても、最強モード的なやつだろ？

つかお前ら、分かってんのか？ ここは街のど真ん中だぞ？

街の連中がワーだのキヤーだの悲鳴を上げてることに、気づかねえのか？

「ひ、姫様と魔族の子が、なんか怒ってるぞ！」

「ギャー！ せ、静電気がー！」

「い、今の魔族の娘の気合いみたいなのやつで、腰が抜けちゃった……」

気づけば街の連中の反応は、「あれが魔族か。厄介者め」から、「何が起こった？」に変化して

いる。

まあ、これはこれでいいかも――。

「どうやら、ヴェルトが二股<sup>ふたまた</sup>かけてるみたいだ！」

「ヴェルト、お前、最低だぞ！」

「姫様を泣かせるなんて許せないわ！」

いや、よくねーな。俺はただ二人を怒らせて、奴らがそれで意気<sup>いきど</sup>投合<sup>とうごう</sup>すればいいと思っただけなのに……街の連中まで俺の敵になってんじゃねーかよ。

でもまあ、アレだ。これはあと一押しすれば、ウラも街の連中に受け入れてもらえそうだ。

俺、死ぬかもしれねーけど……。

「仕方ねえ、遊んでやるか。かかってこいよ」

精一杯かっこつけて言ったが、内心ビクビクだ。

でも、やるしかねえ。

二人とも俺のことを好きだと言っているけど、そんなものは今だけだろう。こいつらは、いづれ俺の手の届かないところに行く。それこそ、世界を、歴史を、変えるかもしれない。

だったら……今だけは一緒に遊んでやるよ。

「いきますわ！」

「いくぞ！」

さあ来い！　と言いたところだが――。

「……やっぱ、無理！」

俺は浮遊<sup>シュウヨウ</sup>を使い、大ジャンプで上空へと逃げる。

「ヴェルト、あなた、いつの間にそんな使い方を！」

「そういえば、ギャンザとの戦いでもそれを！」

ウラには鯨島直伝<sup>じきでん</sup>の空手<sup>からて</sup>がある。俺が真正面から戦うのは自殺行為だ。実力差がありすぎる。

フォルナに関してはもはや説明不要。奴の間合<sup>ま</sup>いに入り込んだらソッコー負ける。

だからこれくらいの距離を取って、セコイ手で攻めるしかないんだよ。

「逃げないで降りてきなさい、ヴェルト！」

「二秒で降りてこい。さもないければ、意地でも落とすぞ」

おーこわ。

それにしても、自分でも驚きだ。

浮遊<sup>シュウヨウ</sup>は……かなり使える。

自分の靴や服を浮遊させることで、俺自身が宙に浮く。

「覚えときな。男は高いところが好きなんだよ」

これなら離れた場所からでも、相手を攻撃できる。

「ぶっとべ」

俺は二人に向かって念じた。

「ッ！」

「か、体が勝手に！」

さっきは二人を宙に浮かせただけだが、今度は後方へと吹っ飛ばす。

まるで超能力者にでもなった気分だ。ハンドパワーで相手を吹き飛ばす感じかな。

だが、さすがに二人ともそこまで甘くねえか。

「同じ手は通用しませんわ！」

「活！」

遠くに飛ばしてやろうとしたのだが、二人はまた俺の浮遊を強制的に解除しやがった。

そして当然、怒ってらっしゃる。額に血管を浮かび上がらせ、次の瞬間、空に浮かんでいる俺目がけて飛んできた。俺がそこまで高いところにいるわけじゃないとはいえ、なんつー脚力だよ。

「もう怒りました！一度叩いて差し上げますわ！」

「お仕置きだ！」

気づけば、腕を振りかぶった二人が俺の目の前にいた。そりゃー、こいつらレベルならこれくらいワケねーか。気づくのが遅すぎた。これじゃ回避できねえ。

「なら、耐えてやるよ！一発くらい！」

前世から今まで、俺がどれだけ殴られてきたと思ってやがる！

ヤセ我慢は不良の得意技だ！全神経集中させてガードすりゃあ――。

「サンダーナックル！」

「魔正拳！」

全身を衝撃が貫く。巨大なハンマーでぶん殴られたような感覚。

「うごほあー！」

やべえ、ヤセ我慢とかのレベルじゃねえ。前世も含めて、こんな強烈なパンチは初めてだ。

俺は受身も取れずに地面に落下した。シャレにならないほど痛え。

「ヴェルト、少しは反省しましたか！」

「次は手加減しないぞ！」

地面に降り立って俺を叱りつける二人……だが、言い返せねえくらい体が痛い。

これはもう、すぐに謝って終わりにしたほうがよさそうだ。

なのに……。

「なんで俺、立……つちやうのかね」

無意識のうちに立っちまったよ。まあ、そりゃそーか。

ガキに見下ろされたまま、引き下がれるわけがねーからな。

ガチで喧嘩する気はなかったが、このまま終わるのは我慢ならねえ。

「むっ、およしなさい、ヴェルト！ ちょっと強くやりすぎましたわ。って、ワタクシはちゃんと加減したのに、あなたが下手だから、ヴェルトがあんなに激しく落下したのですわ！」

「バカを言うな！ 私の体術はお前の無駄に派手で乱暴な魔道兵装とは違う！ お前がやりすぎたんだ！」

「まったく、俺も情けねえな。かつては最強とか自惚れてた不良がこれか？ 十歳のガキどもにここまでバカにされちゃ、男が廢るつてもんだよな。」

「安心しろ。怪我は男の勲章なんだよ！」

「パワー、スピード、魔力、センス。ハッキリ言って俺が二人に勝っているものは一つもない。」

「まったく、そうやって意地ばっかり張って！ ヴェルトは昔からそうですわ！ まあ、そういうところが放っておけないのですけど」

「ヴェルト、お前は戦いには向かない。これから先は、私がお前の代わりに戦おう。ヴェルトが死んだりするのは、絶対に嫌だからな」

「ベラベラとよく喋る奴らだ……だが、俺は俺のやり方でやらせてもらうぜ。」

「だったら、これも覚えておきな。男には、勝てなくても逃げちゃならねえ時がある。まあ、俺の場合は『どんな手を使っても勝つ』って思ってるけどな」

「そうは言ったが……さあどうする？」

「警棒を使うか？ いやいや、女相手に武器とか、最低だから却下だ。」

「素手でぶん殴る？ それもだめだろ。」

「となると。」

「ふわふわ……」

「何となく、俺はそう口にした。」

「試しにやってみただけなのだが。」

「あっ……できた」

「いたたた！ こ、これは、ワタクシたちがさっき砕いた道の破片？」

「ッ！ い、石の破片？ ヴェルト、お前はこの期におよんで、まだそんなイタズラを！」

「さきほどのフォルナとウラの技で砕けた、地面の破片の一部。」

「それを二人の足元から浮かせて、コツンと頭に当ててやった。」

「ダメーじなんてあるわけないし、二人は余計に怒っただけだ。」

「イタズラで済んでるうちは、かわいいもんだろ」

「浮遊は、触れた物だけを浮かせることができる魔法。そう思っていた。」

「くくく、はははははは、こいつは俺も驚いた」

「だが俺は、たった今浮かせた石に一度も触れていない。」

「スーパ―何たちの覚醒とまではいかねーが……スゲーことに気づいちゃったよ」

「そう、俺は気づいちゃった。」

「何を言ってますの？ 往生際が悪いですわ！」

「今ならこれ以上、怒らないでいてやる」

俺の浮遊は……たとえ触れていなくても、視界に入ったものなら浮かせることができる。たぶんな。

誰もが使える初期魔法。この世界ではありふれ過ぎていて、誰も深く追求しなかったのか？ いや、他に窮めるべき魔法がありすぎるから、見落としていたのかもな。

大きな利点だ。今やっているのはストリートファイト。この場にあるもの全部が俺の武器。

道に落ちている石や木材も、そのへんの主婦の買い物袋も——全部だ！

「全部浮けええええええ！」

今はまだ、そこまで重いものを浮かせられるわけじゃねえ。浮かせて動かす速度も。だが、それは魔法の練度を高めていけば向上するはずだ。いつかは家を、城を、大地を、大陸そのものを浮かせることも？

そして、移動させる速度を極限まで高めることも？

できる。俺の生涯、魔法を覚えるキャパシティをすべて浮遊に費やすなら——できる。

「えっ、ええ？ ええええええええ！ な、何ですの、これは！」

「なっ、ば、バカな、ヴェルト、お前、何をした！」

二人が度肝を抜かれている。まあ無理もない。俺自身、驚いているからな。

「お、おい、石が、木材が、樽が！」

「わ、私の買い物袋が！」

「どわあああ、店の看板が！」

街中が無重力空間にでもなったように、様々なものが空に浮かんでいく。

「さあガキども、今度はこっちの番だ。お尻ペンペンしてやる。怒りのふわふわ時間だぜ！」

やべえな。ギャンザとの戦いでコツを掴んだのか、俺もそこそこ強くなってるじゃねえか。

「ヴェルトの奴、一体どんな魔法を使ってるんだ！ あいつは落ちこぼれじゃなかったのか！」

「そうだよ。そもそもあいつは、魔法学校中退だろ！」

街の連中のざわめきすら、今の俺には心地いい。

「そーれ！」

宙に浮かんだ街中の物体。俺はそれを、フォルナたちに向けて空から降らせた。時間差をつけて、四方八方から逃げ場なく。

「くっ、こざかしいですわ！」

「こうなったらすべて打ち落とすまでだ！」

おお、あとでちゃんと弁償しとけよな。

まあ、石やら木材やらをただぶつけたとしても、結果は目に見えている。

フォルナとウラの高速の拳が、飛んでくる物体を次々に打ち落としていく。



「さあ、どうしましたのヴェルト。これでワタクシに勝てると思いますの？」

「お尻ペンペン？　できるものならやってみろ！」

さすがだな。だが、これならどうだ？

「あああ！　ひ、姫様、危ない！　た、樽が！」

他の物の中に紛れ込ませておいた二つの樽が、ウラたちに迫る。

「こんなもの！」

「ふん！」

二人は軽々と樽を砕いた。

中身が何であるかも確認しないで。

「えっ！」

「なっ、何！」

二人が砕いた樽から透明な液体が大量に飛び散る。それを避けることができず、二人はびしょ濡れになった。

「これは、み、水？」

「こっちは……あ、油か！」

正解。水と、油だ。俺はそれを知っていた。樽の持ち主の家に、何度も出前に行ったからな。

「く、これでは、ワタクシの魔法は……」

フォルナの魔法属性は雷。だから自分が水に濡れた状態で魔法を使うと、自滅する恐れがある。これでフォルナの雷は封じた。

「す、滑って、うう、バ、バランスが！」

辺りの地面も自分自身も、油まみれのウラ。奴の空手は踏み込みが重要なわけだが、ヌルヌルしては力が入らない。地面の油は、フォルナの周りにも及んでいる。

「ほれ」

二人の履いている靴の爪先を、俺は手前に引っ張るように少し浮かせた。すると二人はすっぴんころりん。

「ぐっ、ヴェ、ヴェルト！」

「うう、ツルツル滑る、ううう、気持ち悪い！　ベトベトする！」

フォルナは魔法が使えない。ウラは踏み込みができない。

「くはははは、さすがのお姫様たちも、ヌルヌル相撲はやったことがないみてえだな！　ほれ、ほれ、ほれ」

「ぎゃふ、つあ！　いた！　あう！」

「がふっ、たたたた、いた！　や、やめっ、たああ！」

何だかスイッチが入っちゃった。

俺は二人を、何度もひっくり返す。

全身油まみれ、ヌルヌルのベトベトになった二人。

ガキ相手に何をしてるんだか……何か、スゴくいけないことをしている気がする。前世の朝倉リユーマ時代にやったら、逮捕たいほされてたかもしれないねえな。

仕方ねえ。こゝろで手打ちにしてやるか。

「さーて、そろそろ降参したらどうだ」

「なっ！」

「こ、降参だど！」

声を上げる二人。

「ああ。どーせ、俺には勝てねえだろ？」

「だ、誰が降参などするのですか！」

「こんな、こんな卑怯ひきょうな手を使う奴などに屈してたまるか！」

……ふーん、そっか。そういうこと言うんだ。

「あつそ。なら、後悔すんなよな。ほれ！」

奥の手だ。

「ふえ？」

「……えっ？」

俺は、ヨロヨロと立ち上がった二人のスカートの裾を、浮遊レビテーションでめくってやった。

周囲は——三百六十度死角なし。

「はっはー！ どうだ！ パンツ！ ツー！ 丸、見え！ くはははは！」

フォルナは白黒縞しまパンツ。ウラは、水玉模様だ。

「あゝあ、恥おどめずかしい。乙女おとめがよお、はしたないぜ？」

これでギブアップしてくれれば。

「……」

あれ、なぜか二人とも黙もくっちまった。

街の連中も、絶句ぜっくしている。

「ん？ どうした皆？ ウ、ウケると思ったんだけど」

空気がおかしいぞ？ 何か……スゲー重い。

「ヴェ、ヴェルト、おま……そ、それだけは、女の子にやっちゃいけないーだろ」

「ああ！ ママ、見て見て、あの二人、パンツ丸出だしだよ？」

「こ、こら！ 大きな声で言っいてはいけません！ あと、見ちゃダメ！」

俺はアレか？ 外はしたのか？

爆笑を期待してたんだけど……。

フォルナとウラは、まだ黙もくったままだ。

「お、おい、どうした、何か言えよ！ 無言は反則だぞ！」

だが、二人は俺の言葉に反応しない。

そして……奴らの肩が徐々に震えだした。

これは、超プチ切れとか？ そうなったらまずい。

俺はマジで殺されるかもしれねえ。

「あ、あゝ、俺が悪かったよ！ ほんの冗談だからさ、勘弁しろ！」

だが、二人はやはり無言のまま。これは本当に、殺されるかもしれねえな。

俺がそう思った、その時だった。

「……ひっぐ……」

「……ぐす……」

何だ？

「えっ？ お、おい、まさかお前ら……？」

次の瞬間――。

「うっ、うえええええん」

「あああゝ、ああああゝ」

マジギレではなかった。

「ちょ、お前ら、何を泣いてんだよ！」

マジ泣きだった。

二人は油まみれの地べたにベタンと座り込み、人目もはばからずに泣きじゃくる。

「ううう、ヴェルドのバガゝ、イジワル、エツヂゝゝ！ いっぱい転ばせるし……ズルいし、うう」

うう

「ひどい……こんな人前で……うう、うわああああああん」

こ、これは、ある意味一番まずい展開だ！

こいつら、女の最強の武器を使いやがった。

「ああゝ、もう、何なんだよ、たかがスカート……たかが……あれ？ ちょっと待てよ、俺」

待て待て待て。

冷静に考えてみたら、俺が……精神年齢十七歳プラス十歳の男が、十歳のガキのスカートめくりって……。

「うおおおおおお、俺は、俺はアホか！ 馬鹿か！ 死んじまえ！ ああ、ドアホ！ ドアホ！

この変態クソ野郎！」

俺って奴あ……どうしようもねえ！

「うううう、ひっぐ、うう、見られた。うう……国民の前で、ヴェルト以外の人に、うわああ

ああ」

「ばかもの、うう、どうしてこんなイジワル、わだしのことをきらいだから？」

二人のそんな言葉も耳に届かず、俺は油だらけの地面にうずくまり、自分で自分の頭を殴り続



けた。  
「うおおお、このクソバカ野郎！ 俺のタコ、ドカス、クソミソ野郎！」  
まったく……こんな姿、神乃にや絶対見せられねえな。

## 第二章 俺の生きる道

泥んこ遊びをして泥だらけの子供——それはいかにも微笑ましい。

だが俺たち三人は泥じゃなく、油にまみれてヌルヌル……。フオルナも連れてひとまず家に帰ると、先生に深いため息をつかれた。

「「ごめんなさい」」

三人揃って頭を下げる。

「つたく、まあいい。さっさと体洗ってこい」

今回は俺もやり過ぎた。

あのあとすぐ、「ヴェルトたちは痴情のもつれで喧嘩したらしい」という噂が王都中に流れた。

まあ、一種のゴシップみたいなもので、誰も本気にしちゃいないだろうが。

「姫さんの着替えはあとで持っていくます。あと、おいウラちゃん、風呂入ったらこれに着替えな」

「えっ？」

風呂に行こうとするウラに、先生が何かを放った。

それは、女の子用の服。ノースリーブのシャツと、白いスカートだった。

庶民向けの少々安っぽい作りではあるが、素朴でかわいらしいデザインだ。

「あの……これは？」

ウラが聞く。

「さっきな、お前らの喧嘩を見た近所の人が、『ウラちゃんに渡して』って持ってきてくれてよ」

「えっ、私に？ に、人間が？」

ウラは信じられないといった表情で、その服を持ったまま固まっている。無理もない。ついさっきまで、街の連中から「魔族が……」などと煙たがられていたのだから。

先生が近づき、笑いながらウラの頭を撫でる。

「なーんかよ、近所の人らが言ってたぞ。『ヴェルトにイジワルされたら、すぐに相談しろ』ってな」

「え……」

目をぱちくりさせるウラ。

こいつが油まみれであんだけワンワン泣いている姿を見て、街の皆も毒気を抜かれたのかもな。

魔族といってもしよせんは子供だ。もちろん皆、心からウラを迎え入れたってわけじゃないだろうが、そこは何といってもエルファアシア王国。農民の家に、姫様が自由に遊びに来ちまう平和な

国だ。

「くはははは、よかったな、泣き虫」

俺は嬉しくなって笑った。

「うつ、な、泣いてないぞ！ ヴェルト、子供扱いするな！」

「はいはい、よかったねー、泣き虫お姫様。ほれ、さっさと風呂入るぞ」

「あつ、待て、この、うう、私は泣いてなんかないぞ！」

魔族と人間の問題すべてを水に流すとまではいいだろうけど……そんな大きな問題、俺は興味ねえ。

自分の手の届く範囲でウラを守ってやれば、それでいい。

「ちよつ、ワタクシもお風呂に入りたいですわ！」

いきなりフォルナが声を張り上げた。

「おー、入れ入れ。もう一人の泣き虫お姫様よ」

それに……こいつら二人の問題も、少しは解決したかな？

「ううう、今日のヴェルトは一段とイジワルですわ！ ウラも苦勞しますわよ」

「まったくだ。こいつにデカイ顔されるのは気に食わん。今度また二人で挑戦して、絶対に倒してやろう」

そう言っただけで二人。

仲良しとまではいかないが、ライバルってところか。

何だかんだでうまくやっていけそうな二人を見て、俺はホッとした。

「さーて、さっさと風呂に行こうぜ」

油でヌルヌルの二人を連れて、家の風呂場に向かう。

「ううう、この服、結構お気に入りでしたのに。捨てなきゃいけませんわ」

「ヴェルトのせいだ」

廊下を歩きながら二人がぼやく。

「悪かったって。もうしねーよ」

「全然反省がこもってませんわ！」

「ちゃんと謝れ！」

「はいはい、すみませんねー」

「まったく……そもそもヴェルトは、騎士道精神——礼節をもう少し身につけるべきですわ」  
あ？

「そんなでは、将来他国の王族とのパーティーや会談に、あなたを連れて行けないではないですの」

おいおい、何を言ってるんだ？

「ちっ、仕方ない。私も王族の身だ。私のは魔国流だが、今度礼節を叩き込んでやる」

あゝ、はいはい、そうですね。今日は俺が全面的に悪かったですよ。だから、もうネチネチ言うなつての。

「つたく、わかったよ、機会があれば教<sup>おそ</sup>わつてやる」

風呂場の脱衣所に入り、俺は服を脱ぎ始める。

「あつ、ヴェルト、そうやって脱ぎ散らかしてはいけませんわ!」

「本当に子供だ。ちゃんと籠<sup>かご</sup>に入れろ」

こいつら、俺の母ちゃんか?

ぶつぶつ言いながら俺の服を整理しだしたフォルナとウラだったが——ふいにピタリと動きを止め、顔を上げた。

「……お風呂つて、ヴェ、ヴェルトも一緒に入りますの?」

慌てた様子でフォルナが言う。ウラは顔を赤くして黙っている。

「ああ? じゃあ俺が上がるまで向こうで待つてるかよ? それとも先に入るか?」

俺は別にどっちでもいい。まあ、早く汚れを落としてーけど。

つて、こいつら、何をモジモジして……ああ、そうか。恥ずかしいわけね。

「つたく、それじゃあ、お前から先に入れよ。俺はあとでいいから」

「えっ? あつ、でも、その、ええつと」

「いやゝ、あの、その、何だ? ヴェ、ヴェルトがどうしてもつて言うなら一緒に入つてやらんで

も……」

……つたく、このマセガキどもが。なーにを色気づいてやる。

「いいから先入れつて。向こうで待つてつから、上がったら教えるよ」

「ま、待ちなさい! 一緒に入らないとは言つてません! まとめて入つたほうが、お、お湯の節約にもなりますわ!」

あ? 節約? 何でお前がそんなこと気にすんだよ?

「ま、待て待てヴェルト! 三人で入るぞ。うん、は、入るぞ!」

ウラもウラで、なんつー慌てつぷりだ?

一大決心でもしたような顔のフォルナとウラ。お互いしきりに頷きながら、油の染み込んだ自分の服に手をかける。

つたく、たかが十歳のくせに背伸びしやがつて。

そりゃー、公衆の面前でのスカートめくりは精神的にきつかっただろうけど、仲間内のガキ同士で風呂に入るのに、何をそんなに……。

「つと……ふう……」

「よいっしょつと……」

上着を脱ぎ、シャツのボタンを外していく二人。

そして、俺は次の瞬間——衝撃を受けた。



「あつ、も、もう、ヴェルトの、エツチ」

「ス、スケベ、あんまりじつと見るな」

全身に稲妻<sup>いなづま</sup>が走り、気づいたら俺は脱衣所を飛び出して、素っ裸のまま廊下を疾走<sup>しっそう</sup>していた。

「ちよつ、待てえええええええ、そんなバカなあああああああ！」

ありえねえ！ 嘘<sup>うそ</sup>だろ？ 十歳のガキんちやだろうが!?

何で？ どーなってるんだよ！

「ヴェルト、ど、どこ行きますのー！」

「ま、待て！ 何だ、私たちの体が何か変だったのかー？」

脱衣所から聞こえてくる二人の声。

変だったんじゃない。知らなかったんだよ！

「俺はアホか！ あれじゃ、男と風呂に入るのをためらうに決まってるじゃねえかよ！」

どうやら俺、またやらかしてしまつたらしい。

絶叫しながら家中を駆け巡った俺は、気づけば廊下続きのラーメン店<sup>ちやうぼう</sup>の厨房に來ていた。

「うるせーな、どうしたヴェルト！ つて、何だその格好は？ 風呂に入ったんじゃないのかよ」

「ヴェルトくん、何で裸……風邪<sup>かぜ</sup>引きますよ？ あ、お店の中に入ってきちゃダメです！ お客さんに見えちゃうから！」

厨房の入り口に立ち尽くす俺を、先生と、嫁のラーナさんが目を丸くして見つめる。

一応、店内の柱のおかげで、客たちから俺の姿は見えない。

「せ、先生……た、大変だ……」

「あつ？」

「どうしたの？」

唾<sup>つば</sup>を呑み込んだ俺は、たつた今見てしまったことを伝えた。

「フオ、フォルナとウラが、ブ……ブラをしてた！」

「……はっ？」

何だよ！ あいつら子供<sup>こども</sup>だろ！ 何で子供があんなもん着<sup>つ</sup>けてんだよ！

先生はぼりぼりと頭を掻<sup>か</sup>く。

「あゝヴェルト。すまん、俺が悪かった。三人一緒に風呂に行かせたのは、ちとまずかったな」  
近づいて俺の肩に手を置き、俺にだけ聞こえるように囁<sup>ささや</sup>く先生。

「はあ？ いや、それより、どうなってるんだよこの世界は！ 十歳のガキがブラなんてよ！」

「いや、別にこの世界に限った話じゃねーって。日本でも珍しくねーだろ」

「何で？ いらねーだろ！ ガキだぜ？ ガキ！」

「あんな、普通に考えてみる。十歳っていったら、日本じゃ二、三年後には中学生だぞ。別にブラしてたって変じゃねえだろ？」

「……え？」

た、確かに……十歳って、よく考えたらもうすぐ中学生じゃねえか！

この世界は小学校とか中学校とか分かれてないからな、すっかり忘れていた。

「俺、あいつらのことガキだと思ってたけど、そうじゃなかったのか……」

フォルナとは五歳からの付き合いだから、ずーっとガキを相手にしてる感覚だった。そのフォルナと同じ歳ってことで、ウラに対しても似たように接してたな。

「いや、おい、ヴェルト。どうしたんだ？ お前、まさか急に、子供扱いしてたあの二人にドキドキしちゃまったとか言うんじゃない……」

先生。それは違うから。

頼むから、そんなドン引きしたみたいな目で俺を見ないでくれ。俺はロリコンじゃねえ。

「そーじゃねえよ先生。ただ何かさ……ほら、なんつうか、五歳から一緒のフォルナが十歳になって、もうすぐ中学生の歳だなんてよ……年月が経ってるわけだけども、実感が全然湧いてこねーなあって」

「んー、まあ、そうだろうな。俺からしてみりゃ、十代なんてあれこれイベントが目白押しであつという間って感じだよ」

「ああ。なんか、こー、うるせえマセガキがそれなりに成長するくらいに、時間が経っちゃったんだなって思ってるよ」

「な〜にをジジイみたいなことを」

二度目の人生だからだろうか。俺は自分が今十歳であることを、「まだ」十歳だと思っていた。

だが、そうじゃないのかもな。

「もう」十歳、なのかもしれない。

あのギャンザだって、十五歳で人類大連合軍を率いる将を務めてたんだ。

「そう考えると、俺は俺で努力してるつもりだけども……『神乃を探す』って目標をさ、あんま計画なしにタラタラやってるわけにもいかねーなって」

いつか……神乃を探す旅に出よう。

そう思っていた。

だが、その「いつか」てのは、一体いつだ？

「ヴェルトー！ 今さら恥ずかしがってないで早く来なさい！」

「私たちだって恥ずかしいんだぞ！ でも、お前がどうしてもって言うから！」

裸にタオルを巻いたフォルナとウラが、俺を連れ戻しに来た。

この時、いつものように心の中で思っていた「うるせえガキ！」という言葉は、不思議と出てこなかった。

そして、俺はやがて知ることになる。

この荒れ狂う世界の中で、俺たちはいつまでも、子供のままではいられないということ。

「い、いら、しゃいませ〜」

ぎこちない笑顔で、店にやって来た客を精いっぱい出迎えるウラ。

接客など人生で初めてのことだろうし、祖国が減びなかったら一生することはなかっただろう。

「そうだ。いつも笑顔を忘れずに、だ」

俺は厨房から、フロアのウラに声をかける。

「う、うん」

「そして客が来たら即座に水を出して、注文を取る！ この一連の動作を、素早く流れるように！」  
ウラはよくできた奴だった。

あの油まみれになった日の翌日に「魔族の私に、衣食住を提供してくださっているのだ。いつまでもただ甘えているわけにはいかない」と、自分からラーメン屋の手伝いを申し出た。それから一週間、決して楽ではない店の仕事を続けているが、こいつは一度も弱音を吐いていない。

「こ、こちらの、お、奥へどうぞ〜」

白いエプロン姿のウラを見て、これが魔族の姫だなんて誰も思わないだろう。

「おい、ウラ！ 空いた席から皿を片付けろ！」

「分かった！ 今やる！ ヴェルトも、焼きソーバはまだか？」

「い、今やってんだよ。ちっと待ってろ」

「おっ、こんにちは、ウラちゃん。今日もがんばってるね〜」

「おーい、ヴェルト！ 新しい嫁さんにばかり働かせるなよな〜」

一生懸命働く姿というのは、見る人にとって気分がいいものだ。

ウラの熱心な接客のおかげか、店はこのところ今まで以上に繁盛している。

こいつが働くようになって俺の雑用が減ると思っていたんだが……何か前より忙しくなってる気がするな。

「メルマさん、ワンターメンメンとギョウウザ追加だ」

ウラが先生に新たな注文を伝える。ちなみにメルマというのは、先生のこの世界での名前だ。

「あいよ！」

「ラーナさん、壺の中のガリックが空です。予備はどちらに？」

「あら？ ちょっと待っててくださいね。奥の棚にあるから、今取ってきます」

「ヴェルト、焼きソーバが焦げてしまいうぞ。しっかり火加減を見ておけ。ボーツとするんじゃない」

「うるせえウラ！ って、おっ、おとおっと！」

危ねえ危ねえ、本当に焦がしちゃうところだった。

「あっ、い、いらっしゃいませ〜、今テーブル片付けます。えーと、注文ですね、少々お待ちくだ